

海軍艦上爆撃機「流星」風防と熊本の学徒・挺身隊

10 / 17 版

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 代表 高谷 和生

1 はじめに ～残された一枚の写真との出会い～

- 平成25（2013）年長崎県大村市の第二十一海軍航空廠調査のおり、筆者の出身高校（母校）の一枚である「高瀬高等女学校出身挺身隊」1枚の写真と出会う。学校史を紐解くと在生徒の東京第二造兵廠荒尾製造所への勤労学徒動員と併せて、卒業生を中心とした「女子挺身隊」記録が確認された。※『楠のある道から』
- 大村に動員された本班「谷口節子（現姓：福島）さん」の証言を以下に記す。
「私は昭和19年2月の高瀬高女第31回卒業生だった。学校より女子挺身隊としてどの工場に行きたいかの希望をとられ、仲間12人と“大村海軍航空廠”に挺身隊として、卒業式の2日後に鉄道で大村に向かった。まるで遠足気分で行きは楽しかった。12名は宿舎では、2部屋に分かれて居住し、毎朝、隊列を組み行進して、陸軍歩兵連隊の建物横をとおり出勤した。私は修理工場近くの“発動機班”に一人で配置された。班では御船中學生がエンジンを分解し、諫早高女生や多良木高女生と一緒に記録をとり、本部に報告に行った」
- 「この写真は、田中英子隊長達が休みの日に大村市内の写真館で撮ったもの。第2班である自分は写っていないし、残りの6人も写真をとらなかった。写真前列右から「内濱ツヤ子・中山 敏・中原敏子・田代 仁（大村記録では、桎原ハマ子）が、後列右からは、浦田靖子・田中英子隊長」である。本人である「谷口（現福島）節子」の他「添島トシ、西村タズエ、片山恵子、荒瀬京子、平野よう子」の計12人の編制
- 大村所蔵の写真解説には「昭和19年5月4日高瀬高女出身の友達と大村市下諏訪の写真館で撮ったものです。鉢巻はいつも身につけていました」と記され、証言と一致する。
- さらに「私は、昭和20年10月25日の空襲で、防空壕に避難しようとしたが一杯で入れず、海岸に向け避難している最中に、爆弾にあい足を負傷した。宿舎に戻り医務室で治療したが、今もその時の傷が残っている。この卒業アルバムは、空襲で唯一残ったものである。空襲後は、諫早公園近くの疎開工場に移動し、初夏までおり、その後は長女だったので家庭の都合で実家に帰省した」との証言内容であった。

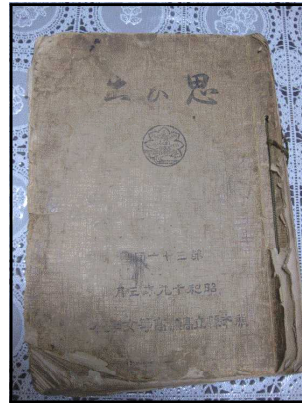


写真1 高瀬高等女学校挺身隊第二十一海軍航空廠派遣の「田中隊（第1班）」集合写真 『楠のある道から』より

写真2 昭和十九年高瀬高等女学校卒業アルバム『思い出』

写真3 福島（旧姓谷口）節子さん

2 第二海軍航空廠への熊本からの学徒動員・挺身隊

- 図1は、片岡源一郎編『回想 第二十一海軍航空廠』21空廠慰霊塔奉賛会・1978年刊行、及び大村歴史資料館作成表「大村への動員学徒・挺身隊（熊本県）」による。
- 日中戦争の激化に伴い、労働力としての学生の役割が重視されるなか、1941年には学生報国隊が編成され、食料増産のための勤労作業に従事するようになった。同年12月の太平洋戦争開戦以降、労働需要は急激に膨張し、国民を総動員業務に協力させる必要に至った。
- 1943年6月25日「学徒戦時動員体制確立要綱」を制定し、「教育錬成内容ノ一環トシテ」との限定はあるものの、学生報国隊による“食糧増産”“国防施設への動員”“緊急物資

増産”などが労務給源としての学徒の集約が始められた。1943年10月「教育ニ関スル戦時非常措置方策」では、学校の修業年限の抑制、学校の整理統合、戦時勤労働員の強化等の措置を決定した。併せて「緊急学徒勤労働員方策要綱」の閣議決定により、動員は継続しながら、**教育実践から「勤労即教育」の視点へと大きく変容した。**

- 1945年3月18日「決戦教育措置要綱」により、「国民学校初等科ヲ除キ、学校ニ於ケル授業ハ昭和二十年4月1日ヨリ昭和二十一年三月三十一日に至る間、1年間、原則トシテ之ヲ停止スル、凡テ戦力増強ニ挺身セシメル」と強化され、中学校・高等女学校の学校工場化、さらには生徒の通年動員により日本での学校教育は完全に崩壊する。
- 全国の敗戦時統計では、「徴用された動員学徒数は340万人、さらには死者10,986人、傷病9,789人」にも及んだとされる。
- 本工場への動員学徒隊は、御船中学（510名）、宇土中学（320名）、八代商業（八代工業・10名）、人吉中学（120名）、熊本工業（人数不明）、天草中学（人数不明）で、入廠日は昭和19年10月20日、配備先は「発動機部工具工場・素材工場・組立工場、飛行機部組立工場」である。
- 1943年11月22日に公布された国民勤労報国協力令により、14歳以上25歳未満の独身女性を対象とした勤労報国隊が編成された。この女子挺身隊では、市町村長会・町内会・部落会の地域、企業等の職域、学校等の学域により編成された女性勤労働員組織である。戦争の長期化に伴う労働力不足を補う為に軍需工場等に動員された。
- 1944年8月22日、日本内地において12歳から40歳までの日本人未婚女子を対象に軍需工場などへ強制動員する勅令第519号「女子挺身勤労令」が公布される。
- 本工場への女子挺身隊は、高瀬高女（12名）、以下人数は不明であるが菊池高女、松橋高女、人吉高女、小国高女、八代成美高女、山鹿高女、多良木高女があげられる。高瀬高女挺身隊の入廠日は昭和19年2月で、発動機部機械工場等である。
- 御船中学校動員学徒殉難の碑建設期生会『御船中学校動員学徒殉難追悼碑 とあまりひとり』及び和田信照氏著『回顧 学徒動員 大村第二十一海軍航空廠』自家製版によると、10名の殉死者は、以下の方々である。牛島 司、緒方茂雄、緒方政秀、大川信宏、九反田孝利、佐藤 孝、篠原久司、田端富士雄、寺林信孝、藤川七郎となる。

その一 動員学徒の部										その二 挺身隊									
出身学校	現在名称	動員数	入隊日	代表世話人又は連絡員	出身学校	現在名称	動員数	入隊日	代表世話人又は連絡員	出身学校	現在名称	動員数	入隊日	代表世話人又は連絡員	出身学校	現在名称	動員数	入隊日	代表世話人又は連絡員
大村中学	大村中学	510	昭和19年10月20日	大村 誠	御船中学	御船中学	510	昭和19年10月20日	御船 誠	宇土中学	宇土中学	320	昭和19年10月20日	宇土 誠	八代商業	八代商業	10	昭和19年10月20日	八代 誠
大村女子職業	大村女子職業	120	昭和19年10月20日	大村 誠	宇土女子職業	宇土女子職業	120	昭和19年10月20日	宇土 誠	八代女子職業	八代女子職業	10	昭和19年10月20日	八代 誠	人吉中学	人吉中学	120	昭和19年10月20日	人吉 誠
大村女子職業	大村女子職業	120	昭和19年10月20日	大村 誠	宇土女子職業	宇土女子職業	120	昭和19年10月20日	宇土 誠	八代女子職業	八代女子職業	10	昭和19年10月20日	八代 誠	人吉中学	人吉中学	120	昭和19年10月20日	人吉 誠
大村女子職業	大村女子職業	120	昭和19年10月20日	大村 誠	宇土女子職業	宇土女子職業	120	昭和19年10月20日	宇土 誠	八代女子職業	八代女子職業	10	昭和19年10月20日	八代 誠	人吉中学	人吉中学	120	昭和19年10月20日	人吉 誠
大村女子職業	大村女子職業	120	昭和19年10月20日	大村 誠	宇土女子職業	宇土女子職業	120	昭和19年10月20日	宇土 誠	八代女子職業	八代女子職業	10	昭和19年10月20日	八代 誠	人吉中学	人吉中学	120	昭和19年10月20日	人吉 誠
大村女子職業	大村女子職業	120	昭和19年10月20日	大村 誠	宇土女子職業	宇土女子職業	120	昭和19年10月20日	宇土 誠	八代女子職業	八代女子職業	10	昭和19年10月20日	八代 誠	人吉中学	人吉中学	120	昭和19年10月20日	人吉 誠
大村女子職業	大村女子職業	120	昭和19年10月20日	大村 誠	宇土女子職業	宇土女子職業	120	昭和19年10月20日	宇土 誠	八代女子職業	八代女子職業	10	昭和19年10月20日	八代 誠	人吉中学	人吉中学	120	昭和19年10月20日	人吉 誠
大村女子職業	大村女子職業	120	昭和19年10月20日	大村 誠	宇土女子職業	宇土女子職業	120	昭和19年10月20日	宇土 誠	八代女子職業	八代女子職業	10	昭和19年10月20日	八代 誠	人吉中学	人吉中学	120	昭和19年10月20日	人吉 誠
大村女子職業	大村女子職業	120	昭和19年10月20日	大村 誠	宇土女子職業	宇土女子職業	120	昭和19年10月20日	宇土 誠	八代女子職業	八代女子職業	10	昭和19年10月20日	八代 誠	人吉中学	人吉中学	120	昭和19年10月20日	人吉 誠

3 熊本県内軍需工場での部品製作等

- 熊本の蚕糸業は長野駿平により、製糸教婦「大野ナミ」が山鹿郡宗方村に移った事等により、山鹿蚕糸組合が設立され、県内各地に広範に伝わった。第一次世界大戦は製糸業にも好景気をもたらしたが、昭和5年をピークに釜数が減少し、昭和10年の製糸企業整備、昭和15年の再整備を経て県内工場は20社以下となった。
- 中国大陸での戦争拡大により、近代設備を誇った上熊本の郡是製糸や熊本・片倉・不知火・来民等の各工場が、その施設設備や関係する人員等の再利用して**航空機工場に転換**した。城北航機株式会社等である。
- 東肥航空株式会社、古庄航空工業株式会社は、中小事業所や新興地域財閥等により設立
- 三菱重工業熊本航空機製作所は、1942年6月15日名古屋航空機製作所の最新配置図等を用い、

熊本市近隣で最も敷地的にゆとりのある健軍に起工されたのが三菱重工業熊本航空機製作所である。三菱重工業所内では機体を生産する第九製作所と称され、兵器等製造事業特別助成法による官設民営の工場として建設、略号「カミク」（官設・民営・熊本工場）とも呼称された。1944年4月29日には、陸軍四式重爆撃機「飛龍」（キヤ六七）一号機の進空式が行われた。熊本製作所で敗戦までに46機（一部資料は42機）の飛龍が誕生した。なお、本工場は1945年5月頃より防諜上「報国熊第一〇一一工場」と呼称された。

□現存する第二十一海軍航空廠『総和二十年一月 会社名簿 飛行機部作業係』によると国内各地で、「229社・工場

銘」が記載されている。熊本県内では、三陽航機株式会社（熊本工場・八代工場）の他、古庄航空工業株式会社（春竹工場・日字工場）、西部航空精機株式会社（熊本市大江町）、合資会社藤田鉄工所（熊本市春竹町）、熊本航空工業株式会社（熊本市内坪井町）の「5社・工場銘」が記載されている。

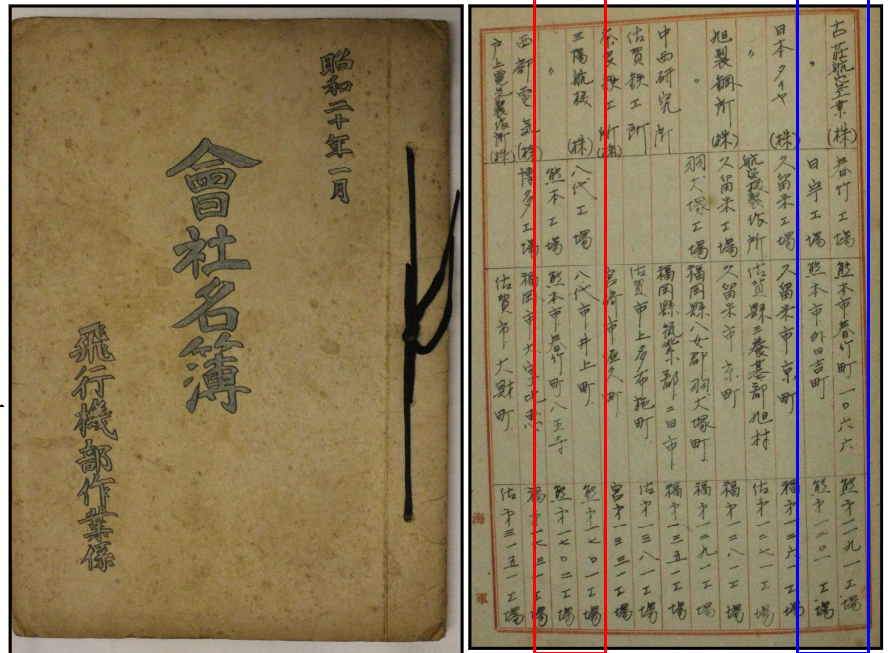


図2 第二十一海軍航空廠『総和二十年一月 会社名簿 飛行機部作業係』
大村市歴史資料館 提供

4 三陽航機株式会社八代工場と「流星」風防の生産

(1) 三陽航機株式会社

- 1942（昭和17）年2月に創立され、熊本市中央区大江町九品寺に事務所を設置
- 創立時の取締役社長は野田卯三郎、専務取締役は木下高、取締役は古莊信一、監査役は岡田米記等の構成員で、航空機工場は熊本市中央区春竹町八王子の松岡製糸株式会社工場の施設をそのまま本社工場にあてた。通りの向かい側には海軍練習機部品を生産していた古庄航空株式会社、東肥航空株式会社もあり、ここ八王子及び南熊本一体は、健軍町の三菱重工業熊本航空機製作所とあわせ、熊本での航空機生産の拠点であった。1945年8月10日の第2回熊本大空襲では、本地区を含む熊本市街地が空襲対象となる。
- 熊本工場（熊本市春竹町八王子・敷地12000㎡・従業員600名）には詫麻工場（熊本市春竹町春竹）も併設しており、一貫して第二十一海軍航空廠の下請け工場として「海軍航空機部品」を生産していた。1945年3月には「有限会社熊本車両製作所（陸軍輜重車や海軍機翼部・飛行機組立用金具を生産）」と「有限会社熊本興機製作所」を吸収合併して拡充する。なお、第二十一海軍航空廠機械部作業班の名簿に部品供給工場として「三陽航機株式会社（原文のママ）」の社名が確認できる。
- 東亜の中心である熊本における新たな産業として航空機産業の育成に向けて、新興の地域財閥である「古庄財閥」航空機産業の実態が浮かび上がってくる。敗戦後、三陽株式会社は事業毎に分割して、航空機部門は三陽企業株式会社が事業清算を行い戦災後の復興にあたる。さらに本会社は幾つかの変遷を経て現在は「株式会社 三陽」として三陽ホールディングス株式会社、三陽フードクリエイト株式等を傘下におき、熊本での経済活動を継続する。1938（昭和13）年3月10日創業から87年の歴史を刻む。

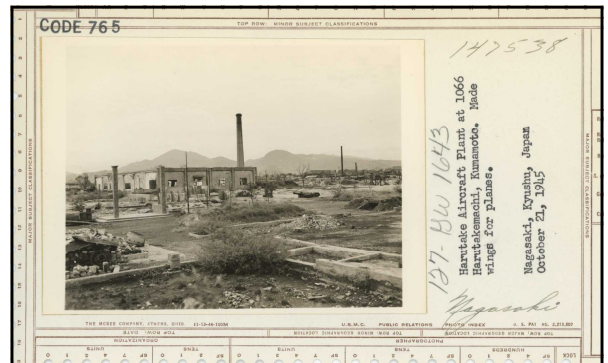


写真4 空襲被害を受けた三陽航機本社工場
1945年10月21日撮影 長崎平和推進協会提供

(2) 三陽航機株式会社八代工場の概要と学徒隊、挺身隊

- 八代工場は1943（昭和18年）2月に開設され、所在地は八代市井上町91番地ほかで、戦後

は東洋繊維株式会社（昭和21年～31年まで）を経て、跡地には八代ドライビングスクールが所在している。鹿児島本線横の立地で車窓からは、三角屋根が鋸刃状に連続する南北主軸の生産工場が良く見えていたと言う。土地購入資金は、三陽自ら鹿児島ニュース会館の売却資金等の100万円をあて、当時不足していた工場建設資材は、熊本工業学校の旧校舎、大分県犬飼町の肥後製糸株式会社の工場資材を解体して充てた。運搬には、海軍から運搬トラックや燃料の支援も受けた。工場敷地は72,000㎡・従業員800人である。

- 本工場では「海軍練習機の胴体後半部」と「B 7（流星）風防」を生産していた。最大で南北300m、東西250mの方形規格の敷地で周囲は板塀で囲まれていた。本部建物（1階に工場長室・庶務・研修室、2階はその他の部品置き場）、胴体組立建物（長尺の鋸屋根の巨大建物で南北二分割して利用。練習機胴体後部の組立）。風防組立建物（風防枠の穴開け、鉚打ち、アクリル板・有機ガラスの取付組立、塗装の工程、検査係はここに居所）、工作建物（工作機械が沢山入っていた）、胴体部品建物（練習機部品倉庫）、風防部品建物（流星風防の部品倉庫兼板材のカット、曲げ、焼き入れ工程）、医務所兼倉庫、守衛所より成っていた。地元八代の記録では、昭和18年4月「三陽航機株式会社、八代に青年学校開設」、昭和19年3月11日「挺身隊壮行会（三陽航機・興国人絹・浅野セメント・昭和農産加工）」が見られる。
- 山本 等さん（二期養成工出身：検査掛工員）証言。「当時工場内では、この生産風防の機種を“B 7”と呼んでいた。風防の部材は春竹本社から板状のもので来ており、工場では“板材の再カット”“曲げ”“焼き入れ”“穴開け”“鉚打ち”“組み立て”“塗装”の工程で製品に仕上げていた。出来上がった製品は、熊本市の本社に鉄道で送っていた」。また、岡山敏雄さん証言では「三陽航機で生産していた部品を、馬車にのせて、八代駅に運んでい。八代駅の貨物を載せるプラットホーム（※筆者註で、通称0番ホームと称していた）で、格子状の木枠に入った風防を見た。どこかに送って組み立てるのだと思った」
- 人吉高女女子挺身隊の岩崎京子さん証言。「昭和20年初め、湯前から人吉女子挺身隊に選ばれ三陽航機へ動員された。工場では飛行機の翼を作っていると聞かされていた。15人前後女性が一組となりハンマーを使って作業した」。また八代高等女学校勤労働員の生徒証言では「昭和20年1月より3月まで三陽航機へ動員。昭和20年1月、八代宮で三陽航機に動員される生徒たちの壮行会があった。ガラスがはめられた風防最前部のジュラルミンに電気ドリルでネジ止めをした。なぜかネジがすぐ曲がってしまい、まっすぐ入れるのが難しかった」とある。



写真5 三陽航機株式会社八代工場スケッチ図 本社
従業員の集合写真 『熊本に生まれて50年』



写真6 昭和20年（1945）1月八代宮にて三陽航機へ動員
となった県立八代高等女学校4年生一同の壮行会
宮本雅江氏提供

5 海軍艦上爆撃機「流星」

(1) 「流星」とは

- 艦上爆撃機「流星」は、太平洋戦争末期に登場した大日本帝国海軍の艦載機である。
- 昭和16年、海軍より愛知航空機株式会社に対し、艦上攻撃機と艦上爆撃機の両機種統合案による試作機作成が命じられた。機体略称は、十六試艦攻試製「流星」B 7 A 1、試製「流星改」B 7 A 2、試製「流星改一」B 7 A 3。連合国によるコードネームは「GRACE（グレース）」。外見上は中翼単葉、逆ガルタイプ翼、全金属製応力外皮構造、二重スロotted・フラップ及び効力板（スポイラー）装備、翼端部は上方内側折りたたみ式、油圧式内側引っ込み脚である。乗員は操縦員と後部乗員（通信・航行・旋回銃手）の2名
- 流星の部隊配備は遅かったが、第三航空艦隊の攻撃第五飛行隊（木更津海軍航空基地）に、

流星を主力とした部隊が編成され、関東防衛の作戦に参加した。敗戦当日、房総半島沖の空母ヨークタウンに第七御盾隊第四次流星隊2機による特攻を行い、海軍公式記録上「最後の特攻」となった。

- 量産型の生産は1944年4月から行われたが、搭載する「誉」発動機の不調や熟練工の不足などの悪条件に加えて、工場爆撃と1944年12月7日に発生した東南海地震による工場の被災もあり、生産は遅々として進まなかった。生産拠点の分散のため、大村の第二十一海軍航空廠での転換生産も行われていたが、あまり生産量は上がりず敗戦を迎えた。最終的な生産機数は試作機9機、愛知製82機、二十一航空廠製21機を含めた112機である。戦後、進駐したアメリカ軍によって6機が接收され4機が渡米し、内1機のみがスミソニアン航空博物館ガーバー施設にて分解状態で保管されている。保管機はカラーリングからして大村で生産され追浜に飛んだ大村空廠製「流星」2機の内1機であり、今だ未復元



写真7 愛知航空機株式会社船方工場もしくは挙母工場で撮影された「流星」機 吉野泰貴氏提供



写真8 海軍攻撃第五飛行隊「流星」 千葉県香取基地内、昭和20年3月下旬から4月上旬撮影。第二十一海軍航空廠生産機 吉野泰貴氏提供

(2) 第二十一海軍航空廠での流星生産

- 長崎県大村市の国道34号線から西側、大村湾に面する一帯は古くから放虎原（ほうこばる）と呼ばれた原野で、1664年に大村藩士千葉ト枕がここを開拓して豊かな農地とした。航空機の大増産を迫られた日本海軍が、手狭な佐世保海軍工廠航空機部にかわる工場用地としてこの土地に目を付け、昭和16年10月1日に第二十一海軍航空廠を開設した。面積約217万平方メートル、建物180棟、人員は最終的に学徒男女8千人を含め約3万人と言われ、当初は零式観測機及びこれらの発動機を、後半期は海軍戦闘機「紫電改」及び「流星」を生産していた。
- 昭和19年10月25日、成都から飛来したB-29、78機による爆撃及びその後の艦載機による攻撃で壊滅的な被害を受け、諫早市、金山跡に分散疎開を開始するも敗戦となった。流星の起工式は1944年1月8日に行われ、第二次拡張工事で完成した「第二組立工場（二万四百九十平米）内」で生産されていた。なお、本航空廠での流星の生産数は21機である。
- 操縦パイロット・蓮本末男さん「思い出の第二十一海軍航空廠」『同友』平成7年「二十

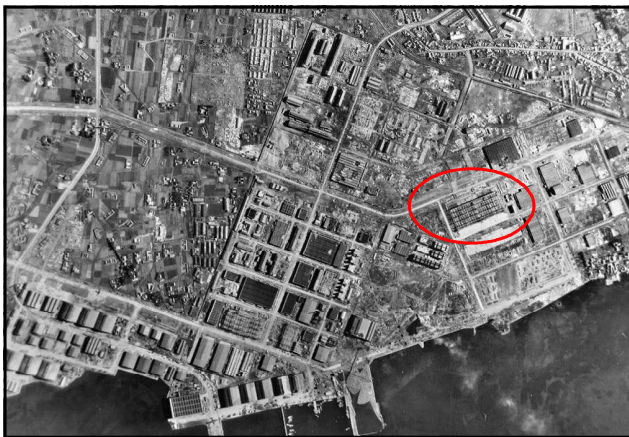


写真9 第二十一海軍航空機廠の空襲前の全景
○印が流星生産の第2組立工場 杉山弘一氏提供



写真10 組立工場内の紫電改 1945年10月12日
RG 80 Box 864 写真番号264887 福林徹氏提供

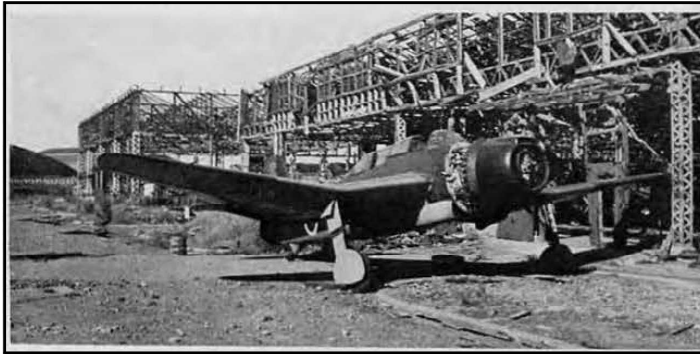
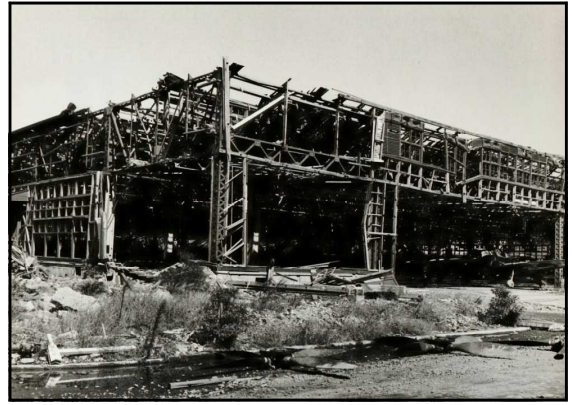


写真11 大村工廠工場内の「流星」

杉山弘一氏提供

写真12 同工廠内「ハンガー」と標記の工場建物
と内部の「紫電改」 1945年10月12日 RG80

Box 864 写真番号264890 福林徹氏提供

写真13 元発動機機械工場周辺部に佇む「流星」
『31st Naval Construction Battalion (1942
-1945)』より 外田洋氏提供

四号、二十五号までは、試飛行した記憶があるので、二十一空廠で作ったB 7は三十機以内と思う」「六人並んだ後に懐かしのB 7。日の丸でないのは最後の機、二機をアメリカ駐留後、研究資料として米国に持ち帰る為に、横須賀航空隊まで空輸したB 7の前の写真である」

- 飛行機部・伊藤 博さんの証言では「私の配属先は飛行機部機械工場で、……当時、二十一空廠では零式水上観測機（F 1 M 2）の生産をマスプロに近い状態で行いながら……**新型攻撃機B 7 A 1**を急遽生産軌道に乗せることになった……昭和19年10月25日の大村大空襲は、第二十一海軍航空廠に集中されて全施設は破壊され……飛行機部機械工場は大村郊外と波佐見金山の地下工場で、終戦の日まで昼夜兼行の生産が続けられることとなった」。「流星の主桁加工」『回想 第21海軍航空廠』1978（昭和53）年。飛行機部・田吉 豊さん「**流星の起工式は昭和19年1月8日**でした。当時の廠長、中村伍郎少将を迎えて飛行機部は……今後の門出を祝いました」「当時、第二次拡張工事も完成し吾々の**第二組立工場（二万四百九十平米）**は空廠第一の偉容を誇るものであった。本年4月に1号機の試作を終えたB 7 A 1の大量生産に関するすべての準備は完了し、組立治具の上にはすでに機体が続々とならんで……」。掲載「忘れられぬ日」『回想 第21海軍航空廠』1978（昭和53）年

- 第一三〇空攻撃第五飛行隊兵器部の井本辰美さんの証言「私と海軍艦上爆撃機流星との出会い」では「攻撃第五飛行隊（通称K 5 隊）に所属し、4 月末木更津基地に移動後、7 月10日に仲間10人と大村へ派遣され、機体に吊下する爆弾や兵器の整備にあたった」

- 本写真10について、当初筆者は組立を行っていた「第二組立工場」と想定していた。ただ、写真9の天井高のある紫電改組立写真に見られる状況とは異なり、建物高の低い工場建物内での撮影である。

- 図3・アジア歴史資料センター蔵
「航空兵器現状表（大村地区廠
内）昭和二十年八月三十一日現在
第二十一海軍航空廠」によれば、

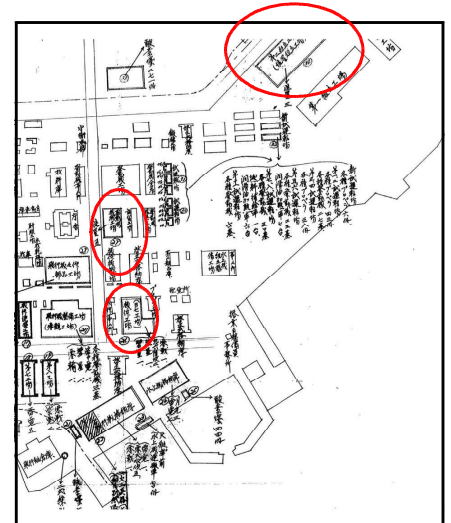
[illegible]

図3 航空兵器現状表（大村地区廠内）「流星」機数
流星機の残置状況は赤丸の三箇所です「計九機」 アジ歴資料

「飛行機 流星一一型」「九機」とあり「機体工場（B七工場）1／0 流星組立工場3／0 元発動機機械工場5／0」との記載内容から、この内で天井高の低い、機械もしくは組立の二箇所工場内と想定する。

- 写真13では敗戦後移駐した米海軍建設工兵隊による「1945年10月12日の撮影」撮影である。屋外の広い道路敷きで、背景にドーム形状の格納庫様が見えることから、元発動機機械工場周辺部と想定する。

（3）流星風防の概要

※本会発行の平和継承リーフレット『熊本の航空遺産と海軍艦上爆撃機 流星』

- 2013（平成25）年9月、熊本産業遺産研究会の松本晋一氏より、八代で鉄道愛好家の小澤年満氏（故人）が保管されていた軍用機「流星」風防の資料調査及び公開に向けてのコーディネート依頼があった。直ちに現在の保管状況での法量計測や材質調査、現況写真の撮影、生産を行った三陽航機株式会社に関わる文献調査、八代工場関係者の証言聞き取りを進め、数度にわたり大村市を訪問し、第二十一海軍航空廠での流星生産に関わる資料調査を行った。
- ただ、最大の課題は、日本には実機が存在せず、八代資料との照合ができないことであった。そうした中で運良く世界で1機だけ実機が残されている「スミソニアン航空博物館ガーバー航空機修復施設（PEGF）」で、実機を実見した日本航空協会副部長の長嶋宏行氏にコンタクトを取ることができ、比較検証等でのアドバイスをいただいた。また、岩手の航空機研究家佐藤邦彦氏には、多くの洋書や各種資料の提供を受けた。
- 調査の結果、遺存風防は5分割パーツで、残り1パーツが欠損していることが判明した。強化磨きガラス（無機のソーダ石灰ガラス）部、長い年月の間にたわみやゆがみが見られるが有機ガラス（アクリル酸エステル樹脂の透明なプラスチック・匂い硝子・プレキシ硝子）部の残存等も良好であり、前・後席の風防スライドヒンジや閉塞の為の木製取っ手の仕掛けも良好に残されており、強度を必要とするヒンジ類やスライド部材は鉄製である。
- 平成26（2014）年2月24日に報道発表を行い、日本で唯一の「流星風防」を公開した。



写真14 戦後も三陽航機関係者宅に残されていた「流星」風防、調査の様子 2013年9月撮影

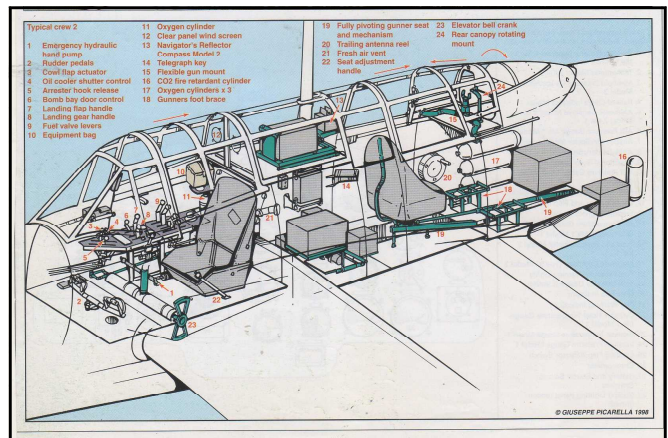


図4 ミケシュ氏著書での「流星」構造図

（4）流星風防の各機能等

- 第1固定風防及び第3・4可動風防についてのみ、世界で唯一実機が現存するスミソニアン国立航空宇宙博物館・別館ガーバー保存施設内の流星と比較してその技術・機能等を更に補足説明する。

ア 第1固定風防

- 操縦席前席の「固定第一風防」の風防枠基部・下部は「ジュラルミン一発整形」である。
- 風防先端部の強化磨き板ガラス1枚、側面4枚の平板アクリル材、天井部には曲面アクリル材1枚の各部材をジュラルミンの細い板状部材と内面には窓枠強化用の4箇所T型鉄製金具で固定し風防枠を形成している。全体的に「か細く」きゃしゃな感じではあるが、空気抵抗を減ずる工夫が丁寧になされている。また、正面には機内への空気吸入の換気ダクト挿入口が穿たれている。

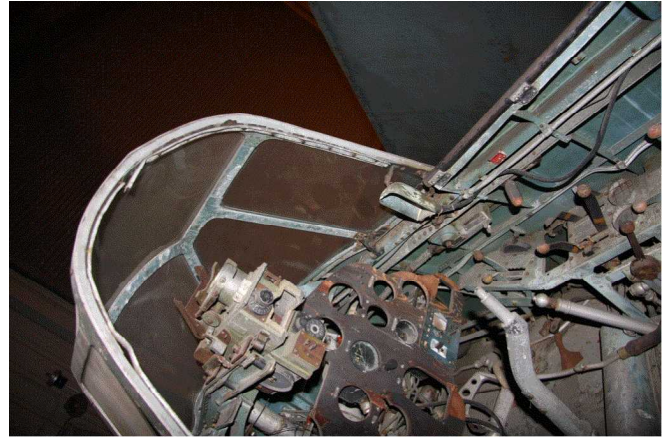


写真15・16 ガーバー保存施設内で撮影された「流星」機体と「第1固定風防と計器盤」 長島宏行氏提供

イ 第3可動風防と第4可動風防

- 機銃射界確保の為の風防作動要領は、先ず手で**第3可動風防**（機首から見て）左手前の固定用垂直レバーの上部に付くボタンを押してロック解除し、機首側前方部へスライドさせ、カチッと止まるまで移動させる。ヒンジ下部先端は丸くなっており機体側に付く筒型のレールに沿って風防ごと第2可動風防内側に収納される。
- 第4可動風防**は前後取付け軸を中心に180度回転し射撃時の視界確保のため下部に収納される。内面には13mm機銃固定用の鉄製金具が附帯する。またバレルクリアランスの為のへこみがあり、これは「愛知（M6A）晴嵐」と基本構造が一緒で、銃身もろとも回転して収納される。ガーバー施設内の展示機晴嵐の紹介写真等からもこの構造が確認できる。図4の日本機大図鑑内「晴嵐」頁を参照いただきたい。

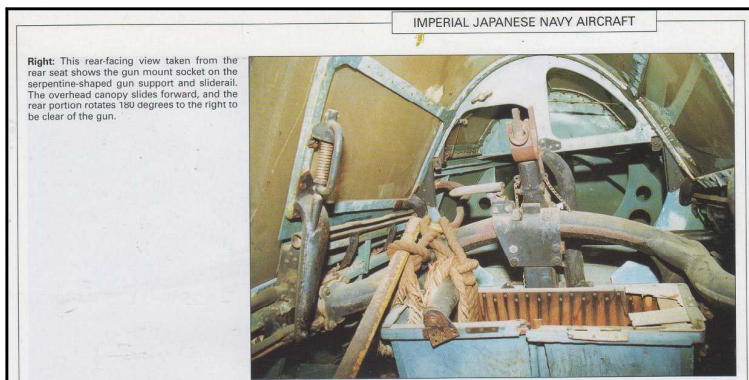


図5 ガーバー施設内の「流星」後部 席と第3可動風防、回転式の第4可動風防 ミケシュ氏著書 佐藤邦彦氏所蔵

図6 「晴嵐」後席全容と旋回機銃



(5) 「流星」とその戦後 ～もう1枚の写真から～

- 写真17は、平成6年9月に蓮本末男（元操縦パイロット・海軍少尉）さんの自宅から偶然発見されたものである。写真中央で、右から3人目が蓮本さんである。蓮本証言では「黒崎・高野・安部・鈴木の諸氏に囲まれた」「日の丸でないのは最後の機、二機をアメリカ軍進駐後、研究資料として米国に持ち帰る為に、横須賀航空隊まで空輸したB7の前の写真」「最後の二機目を再度空輸して任務を終えて」と記されている。このカット及び写真18については、昭和20年10月撮影であるが、どちらの空輸時かは不明である。
- また、同写真は人吉海軍航空隊基地資料館では「・厚木基地に（神奈川県）へ向かうために大村飛行場で撮られた・」と記載されている。ただ移送先は蓮本証言、『流星戦記』及び吉野泰貴氏紹介文に記載されている様に「神奈川県追浜基地」である。



写真17 戦後大村基地から横浜追浜基地へ移送される流星。主翼には星印が見える。『楠のある道から』より

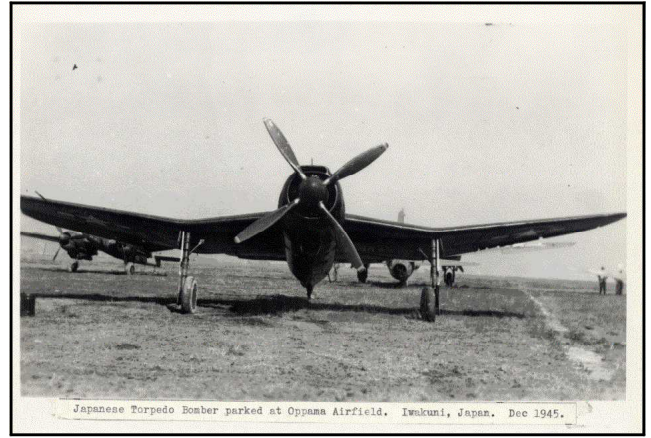


写真18 米軍引渡のために経由地の岩国飛行場を訪れた大村から移送の「流星」 吉野泰貴氏提供

6 まとめ 「平和のバトン 未来へ」

今年は「戦後80年」であり「昭和100年」。歴史へ移行する分かれ目

※本会発行の平和継承リーフレット『進駐軍が見た熊本 I・II』参照

- 戦後74年となる平成26（2014）年8月1日～30日までの期間、熊本県玉名市「玉名歴史博物館」エントランスホールで流星風防の公開「流星風防と第二十一海軍航空廠資料展」を行い、全国から航空ファンが詰め寄せ、大きな反響となった。高瀬高女挺身隊の1枚の写真から、導かれる様にして、大村の二十一航空廠で生産された希有な艦上爆撃機「流星」風防の調査・公開ができたこと、2021年（令和3）年第8回空襲・戦災・戦争遺跡を考える九州・山口地区交流会大村集会」での発表、今回の大村史談会様からの依頼講演に、不思議なご縁を感じる。



写真19 熊本県玉名市「玉名歴史博物館」で公開された「流星風防と第二十一海軍航空廠資料展」の様子

- 現在「流星」風防は、「常設展示が可能な施設」という現所有者小澤光二氏の意向に添い、錦町立人吉海軍航空基地資料館で委託展示がなされている。
- 将来的には「八代市指定文化財（歴史資料・航空遺産）」への指定を
- 令和7年度大村市歴史資料館特別展「大村と戦争・その記憶と継承」「Never forget」では、郷土における戦争の記録・記憶を展示し、現在の「平和」の背景を振り返る企画展 ※ながさきピース文化祭2025

- 大村史談会による「郷土史講演会」による「歴史実相の解明と市民啓発」の重要性

- 改めて調べ、検証された「熊本からの学徒・挺身隊」「熊本の航空機生産」の実相

- 一人ひとりが戦争遺跡・遺産と向き合い「語り手」「継承者」として語り継ぐ
 - ①戦争遺跡の調査、保存、継承・活用は市民グループと行政との「新たな連携」
 - ②戦争遺跡・遺産は、貴重な歴史資料として「国民共有の財産“文化財”」
 - ③戦争遺跡、庶民の戦時資料の調査と継承は「地域協働の平和学」

- 次世代への継承「たまな地域高校生ピースボランティア」での取り組みと活動

- ウクライナ戦争、ガザ戦闘と重なる「太平洋戦争」の姿！
- 戦後80年、昭和100年の史実に込められた「歴史の重み」「昭和の歴史」を教訓に！
- 平和継承のための「戦争実相理解」と「平和の感性」を！
- 地域の特性を基にした「平和の希求を！」